目録

五ろう 并三

哥と詞を名とをわ

[V.25]

PL788
.4
.G4
1654
vol.25
Copy 1
Asian
Japan
Case

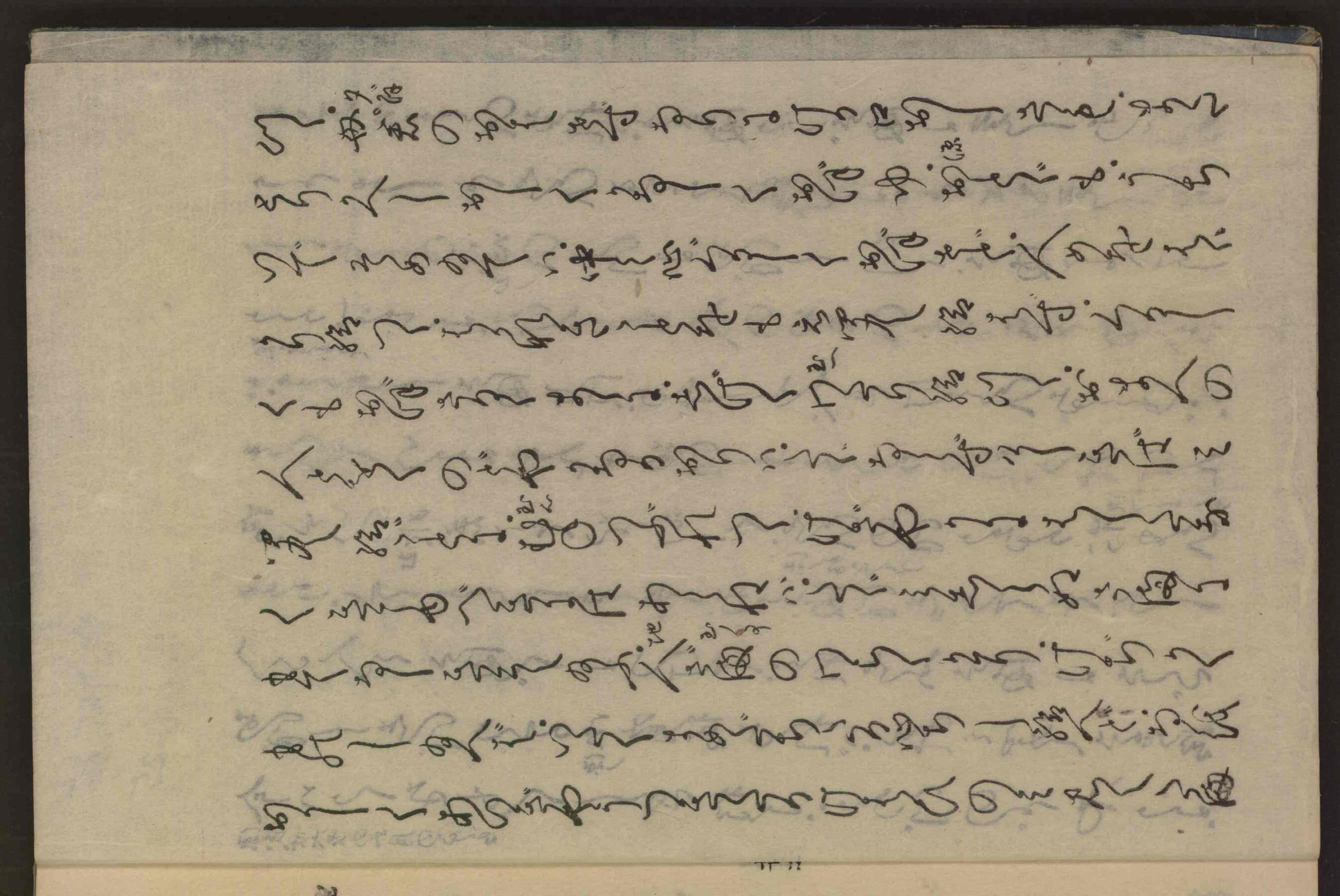
LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

30

源氏廿六夕の六月のゆき

今いくをもくしき程ゆ。よろづのどやかな。
おぼしたづめたる（源ノ）れ有様なれば。これに異しさを給
へるんぐ。さ海ぐまつけて。これもふさ海まさぐ
まり。ぐよそしうそぐ。おし海はしらてもぐし
給。さいの姫（む）君こそいとおしく。さひの（源ノ好きゝ事）ほうなるおもひ
そひて。いまをんとおぼしこぐろめれ。うれげん（法ゝしまゝ事）
か。うりしさ海ほ。なずふべきけもひなしほど。
親子ノ分ニて
うろすぢまかけても人のおもひよりまさしもべき
ことなしほが心（む）ひとりにおぼしけしさ海ことより
うとましとさひまさて給。なまごとをも見しまり
ようれよそひなれば。とさ海うぐさ海ほ見しあけめ



ひく。母（タダ）君のおもしき寸なりまけり口おしさも。まさ
とりくしおしくなるしくおぼゆ。おとゞも（源）うち
いでそめなてい。中心ぐるしくおぼさど。人めをもて
ら給つ。たゞれきことをも元明し給ち寸。くらし
くもおぼさるまゝ。しげくひ（むへ）たり給ひし。おまへの
人とまくのどやかなりかりいたゞなしすなしさばそ
男給ごとよ。むすつ（むん）ぶれつ。けぎやかまもしかな
くさもべきまはあしねいたゞこしぬさ面な
まてなしさそしおふ。人ざ面（地）（むくす）のひらくかり。けぢかく
まれしおへだいたくまめぐちろ心ちし給へどお紙
おしくあのぎやうつきたりけるひのそもしろ面

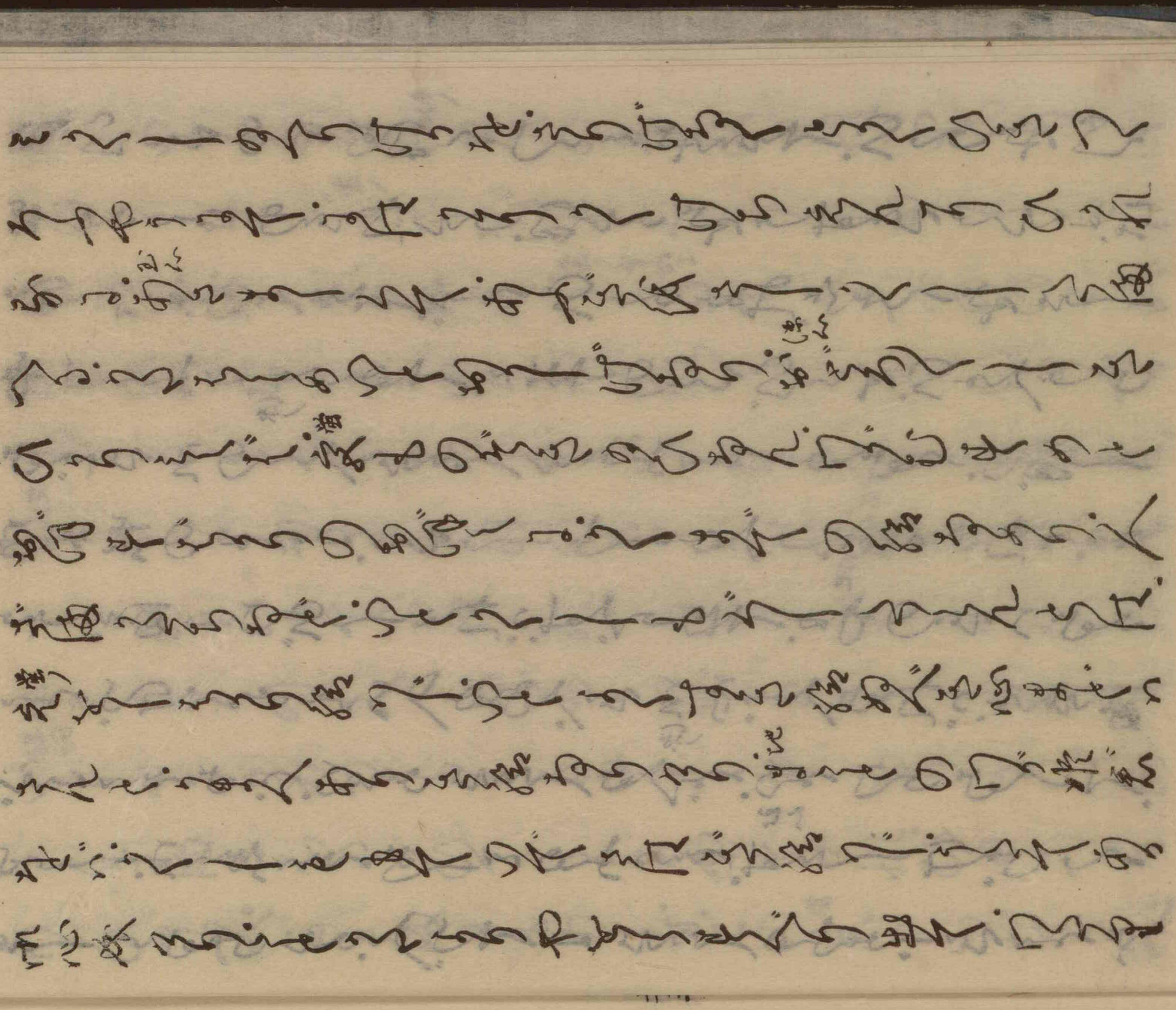
へいちうの家なとはめやすくおもひて給は
らうの将はいとかなしうおほえなりぬる
すれへとゆきてなをえしけうるに将をたゝゆるし給
ちゝかりけるをもおもひけるにてしのひけれとえて
かへるなむ養めしんしておはりける比此大臣のむすめ給
ちんたゝか家ありけりしかもてさあれてあふてし給
そとよしへてれのくりけるに男しのへとてれのへ
よしへてつくもなりのへともいとうらうてみえしなへも
ふくり心ちつけしとて男し給ひすへ人ともつとうまやむ
ことなくなとをまさなとおほしてけれしこてく
北のれとなりけり宰相なりの人のむすめ

まて心ぞをなど口おしうゝぬが世りおとろん
ありさうを。弱さりゆへるぞ。寧ねの君とて。くるなど
もよろしくうさ。おほうるもおとるびろん人なれど。
さるべきありくの出来りなどうせたまへがゆし(添ノ)
出てこと紫などの給てうをまふ。拙(堂ノ)などのこまふ
さ夜をゆしとおぼしたるべし。さうじこは。うく
うさてあり拙なげしされ後は。この宴(堂)などは哀
げるこそし給ひ。ずこしいれまふ時もありけり。
ちるうとおもふまはおしず。うく心うき出気色こゝぬ
まぎもがれと。さすがるされたる所つきておぼし
けり。夜(ほ)はあいなくをのれとろげさうして。宴(堂)を給

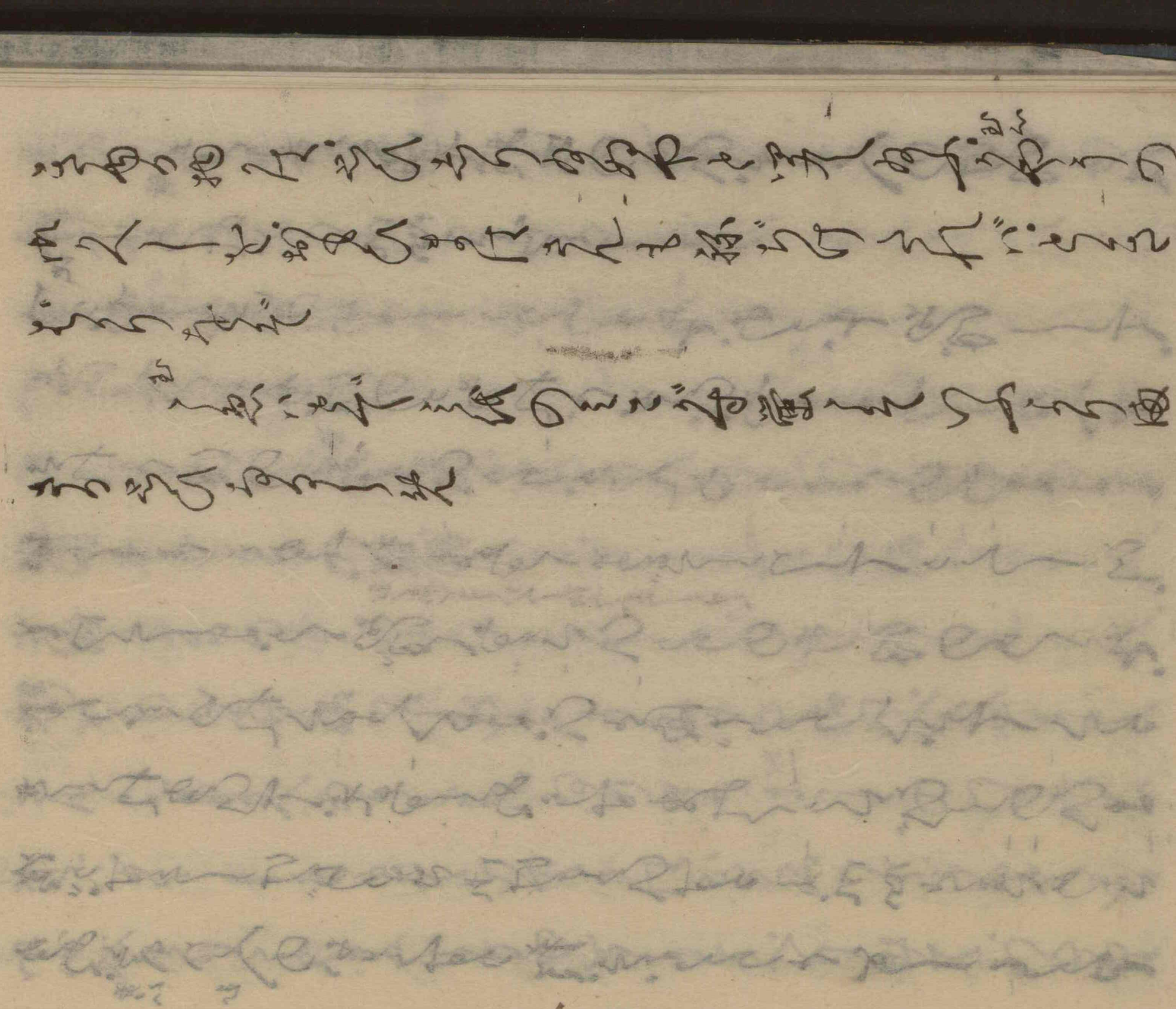
宮の給はしけり給ふまで。（紫ノ）ところしきれの人々ともなきを御覧（螢ノ）
ずしけりて。いとしものびやかにておかしきまうし
さりけ。まどのまきれちとり数しきて。ことまうすりを
（ふそ）備まで。らうたき程なり。（源ノ）いとつきづき心して。定ぶたき御心
よくなき程にほけりて。（玉と）つくろひおもむすなき度。おや
まはおしそむつしきされさりしらん人のさすがなり
義よそしかふ（玉ノ無ぞう）寧ねのおちるども。人のかいつく人めえん
ふくもおぼしずちつりくそねうるをじ（源ノ）まれさう
とのきつきのへびいひ（寧れ仏）ワりかし。（世）やえるて。おぼ
つゐるみそ定の気色のくましりしをまう打ちありうこう
（螢）定のれけるひも。いとえんなりうちよるほのめく（とひ）遁

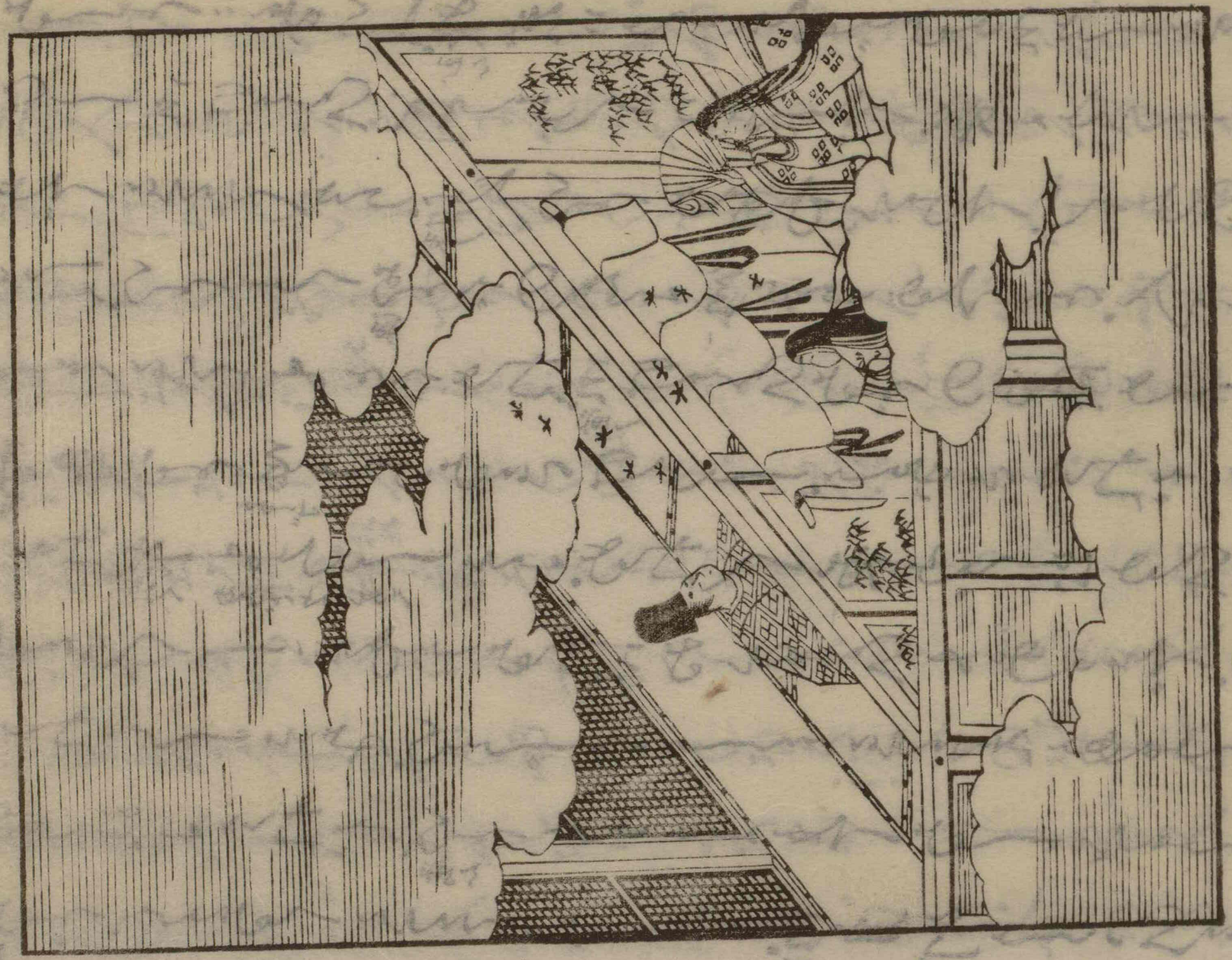
風もいとゞしきれ(ほノ)匂ひの立そひたれがいとゞうく
ほりうちて(蛍ノ)ゐてあげししたれ
けたひを心とゞめ給ふ(蛍ノ宰相は)うち出て、さふ心の目ど紙
のゆひつゞけたる云の葉、おとれしく、ひたふる
ま、すきぐしくいあしぞいとけたひことなるを、
(源ハ)おとゞいとあしとほのきくおり寸、(玉)姫君は東おも
てまひきいりて、おほとれでもりまけり、宰相の君、
れをうそこけたへま、おざるといでたりつけて、
(源詞)いとあまりあつかしきれもてなしなり、よろづの
ことゞさ海まをたゞひてこそめやすれ、ひたふる
ワかびのゆべきさ海まもあしず、この(蛍)文たちなきへ

きしもなちたる。人づてにきこしめしまじきことか
アるし。れこ急こそおしこめふとも。すこしけぢかく
ごまこそなど。いさめきこしめへど。いとワりなくて。
ことづけてももいへめめべきれ(添ノ)心ぢんなれば。とき後
うつぎ面にワびしきれば。すべり出て。もやのきいなる
れ末帳のもとに。うるりしかしめへり。なまれと。こと
なるきれいしへきこしこまふこともなく。おぼし
やすしふに。よりめて。こ車のるびしを。ひとへうち
かけ給ふ。あそきて。ざとひかるもれ。志そくをさし
出たるとあきれたり。ほうをうすきうるに。此
夕川うるいとおほくつこをきて。ひかりをけ



なぬ。愛(勇ム)は人(む)のかたすり程。さぞりとをしもり里
浩がすうしけぢりきれけもひするまれ心とさめき
きれなひて。元ぬうすもれくるびくのひま
よりぞいれこまへるまひと夜ぢりへぞてこう
こひしまぐおぼしなきひりの折はのめくを。
おかしとこなふ。程(むゝ扇とさしかくぬてたしるまへ)もなくまぎこりてかくし川。
されどほのかなりひりえんなることのつままも
志けべくこゑほのかなれどそびやかまふしぬ里
つりやうぶいのおしりつりをおりぎおぼして。
けまあれどれ心まきこまかり
なく声も罕(勇)ぬ虫のさひぶま人のけはりは





比
ちどもちくさくしてゆ身げうらはひさ
いり語まれば。いと（蛍ん）もりかまてなしうまふ
うれもしさをいうじくうしきろえ為まふ。
すきぐしこさやうなれバねうまひもありさで。の
これ雫（しづく）もくるし（あるどかりくろこ）さるぬれく夜ふく出ぬひぬ。
比
時鳥ちど必（うらず）うちなきけらし。うなさなれぞえ
こそきくもとぐめれ。れ（蛍ノ）けもひなどのな夜めし
さは。いとよくおとぐ（涼）のたる川まりぬへりと。人ぞも
めできくしかり。よへ（涼ノ）いとめなやざちてづくろひ結
ひしれけもひを。うちくはしくで。衣よりうじけ
ちしとこないふ。姫（むん）君はかくさすがちれかしさ後。

けが身づらのうさぞかし。おやなどにしられなり。
世の人のさかさ海にてがやうなる此心ぞ人なる
ましかばなどいとまげなくもあらまし。人まゝぬ
有情こそつゐに世がたりにやなんとおきふし
おぼしなやむ。さらしまことにゆかしげなさ海
まはまてなしそてじとおとゞはおぼしなり。れうる
此心がきなれば。伊(秋好)家などもいとうるさしくや
ちひ罪しゐるゝとにふれつゝたゞなしぎこそ
うごかしなどしゐんどやんごとなきなるのをよびて
なさまはづらりしくておりたちあらりしこそ
給ひぬをこの君(む)は人のれさ海もけぢらく。今めさ

ことよ。をのづらせひ恵びがこそこよ。おりく人ん
なりつけバ。うこがひおひぬべきれもてあしあど。
うちまじ家ひぎあれど。をがこくおぼしへして。
さすがあるれ中成なり。文月日まはむまぞのおとぐま
出給けるつゐでよ。ひへ。ひこりあへり。いふ詞ぞや。文雲も
夜やふしあひし。いこくもあらしをこそしじ。
ひづらもしきけそひあへる人ぞや。人の心やぶり。
物のあやまちすまじき人ハ。かくこそありなれ
あじ。いけ地こころしこ。いましめおはすれさ後。つき
をぼひくこそかげまこそ給。つやも文もこぼるがり
あるれぞよ。れあ紙しもあるくをあれるあひも。

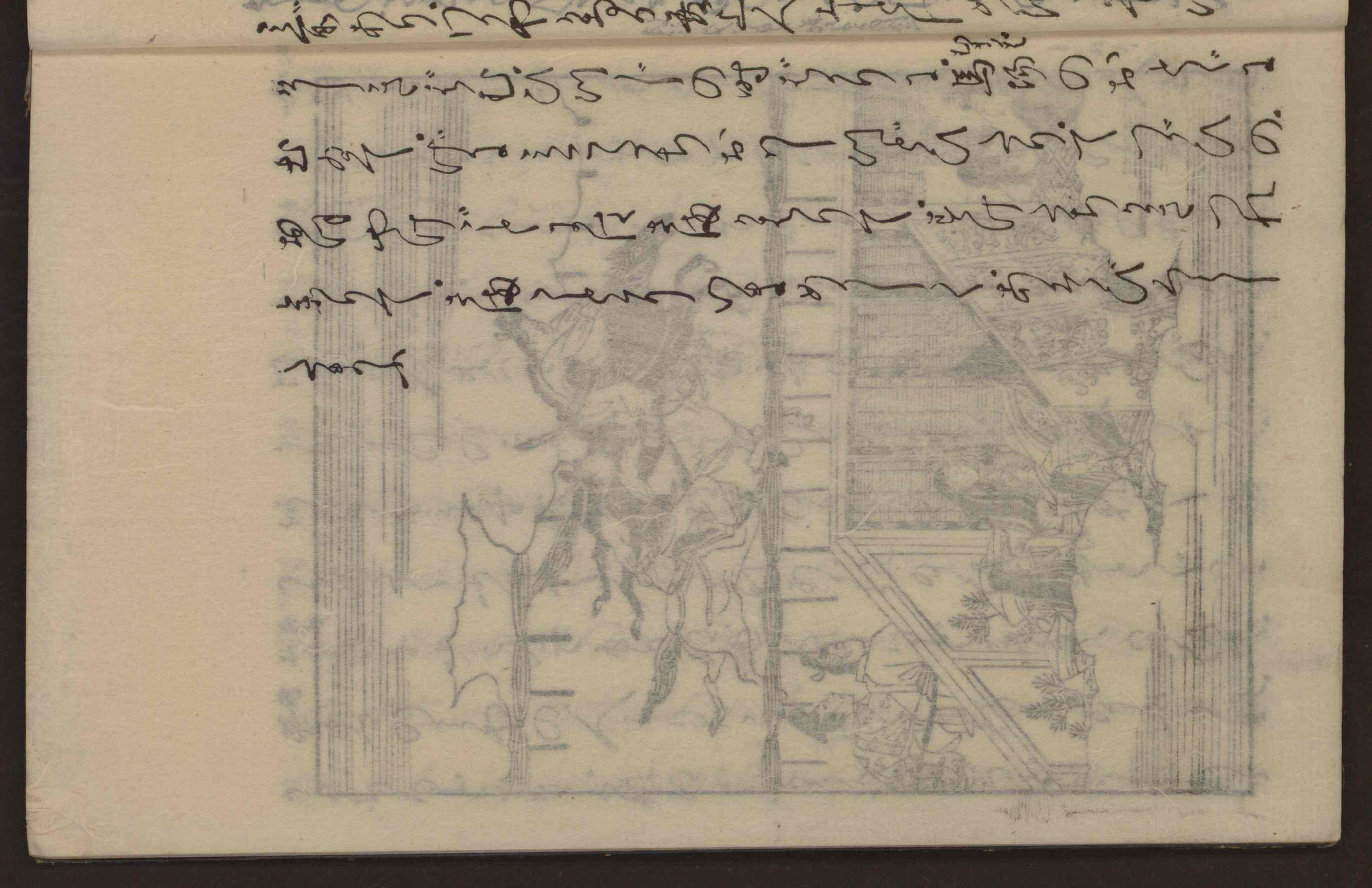
いづこなくなりしかるにしかあらん。此世の人の
深出しかるとこそぞ。つるの多もかへぬあやめも。
かへはめづらかなおりしうおぼゆるかほ里なすぐこも。
せふことなくはおりしかりぬべきれ有さ海かなすく。
姫君はおぼせて。宮よりれふこあり。しろきうすやう
まてれ手はいとよしありてかきなしかへり。こう程
こそおりしかりかれ。まるびいづれだことなること
なしや

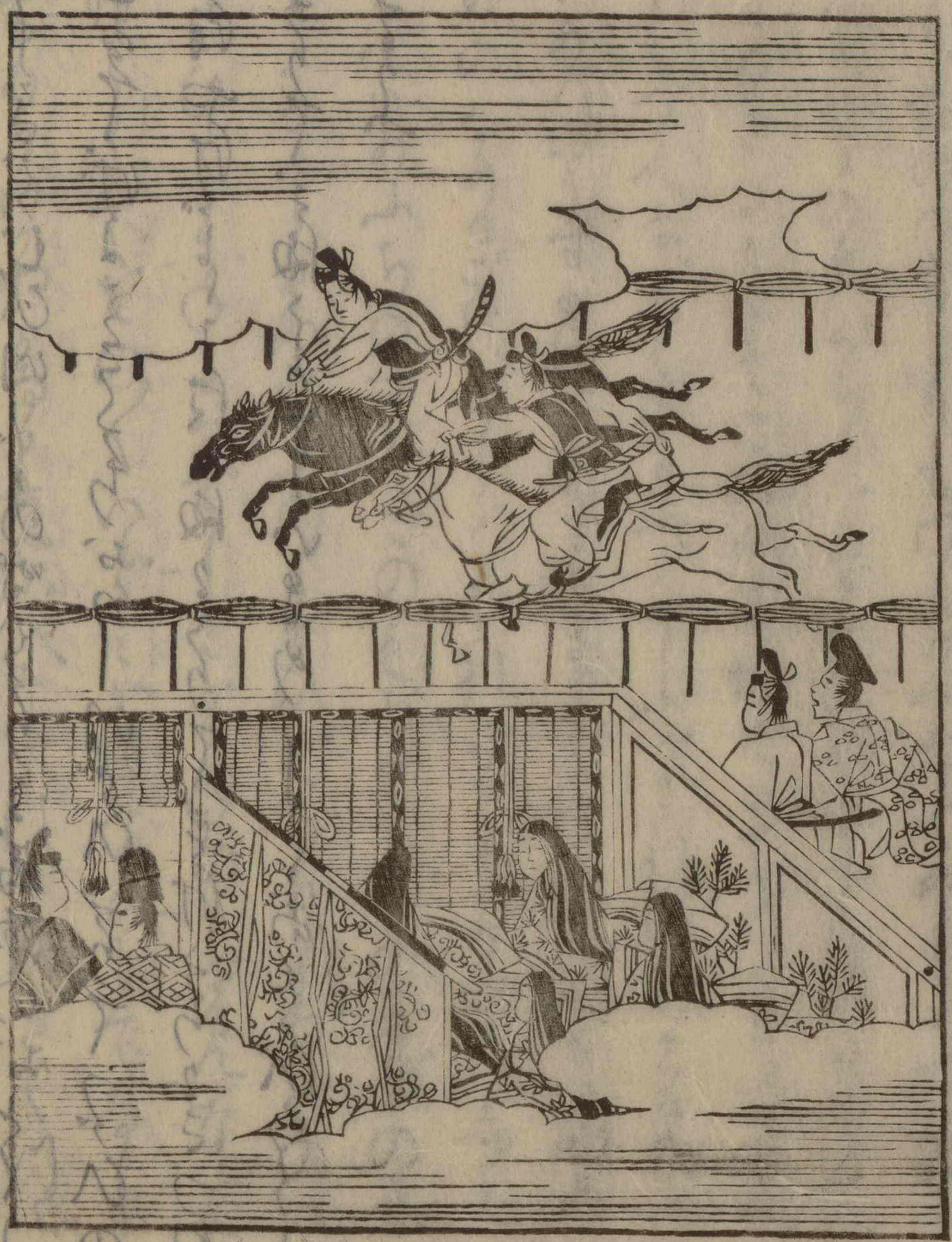
宮 かふさへやひく人もなきこゞくれはおふれ
あやめれ孫のこちがれんこあしまもひき出けべき
孫にむすびつけなへれば。かふ 源村 れれかへりなどそぐの

くしまて出ぬられくれもあせとしにあれぬむかし
心はもいかばかりおぼしけん
むわすられていとぶかき色にゆかれおやめも
ワずかなれけるもの。ワかくしくとぞかうりける
のかるであんめる池をいまみすかしゆへづけく
だとく。蛍かこのおしこされ心ならばかりおろぬことく
ことけんし。くはしむかしえあらぬ夜まで歌く
よりおほかり。むかしえおぼしえげにつかの世の文なおなさ
此有様みて心ゆかびなこともおほかるにあらずくは
ひとのくるずつくづかりのよしなくても。やこうし
これとかくおぼさしん。涙し東のれをぐま

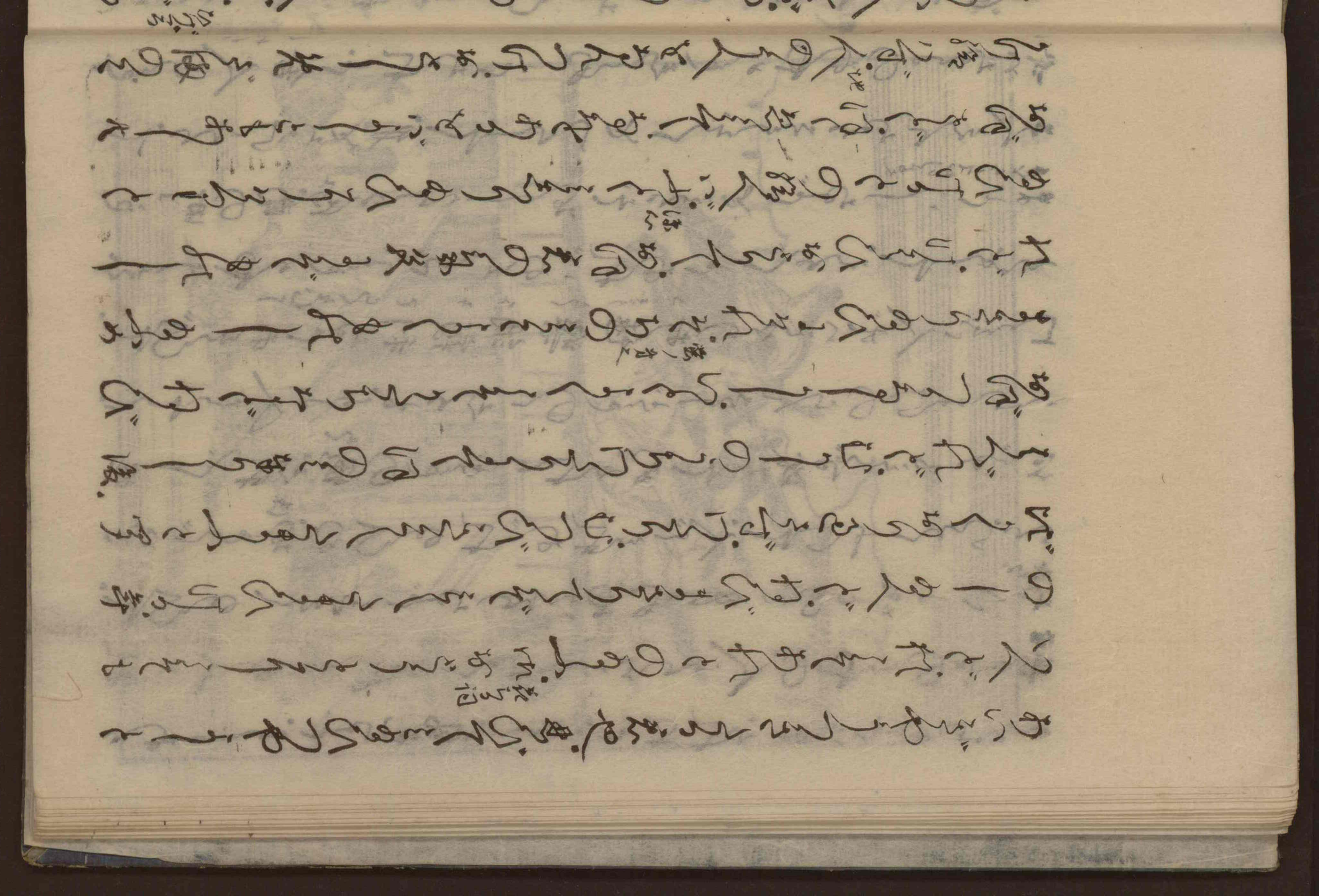
きしのぞきまひて、中拘（漢詩 夕ゝ寄 花ちるこの頃之）の川ふの川くさのまゝ川がひ
の川いでゝ、をのこども引つれて、拘まべ、ささ海に
いひしを、さる心しあへ、まゝあるさ程にさるん
拘ぞ、おやしく寄まは、けぎとまらずしのぶること
ともこのこゝろのきつけて、とふひもれし
あへぞ、をのづしとくしくなんあるを、ようい
しあへなど罪しあふ、ひまぞのおとぐいとなるの底（花ちる）（ちう）
ようこともすほどをくしず、けうさ人ぐ、けさどのく
戸あけてもれこゝよや、たの川くさにいとよしある
宿人（兒ゝん）おほうころなりをうくの夜ぶ人ぐりをとる
まじとの宿へバ拘（地）こんことにいとおしとおも

へるも。基(紫)の此方よりも。けらりべるぞ抱えるけらを
とそ。らうの戸ぐらに。こすあ紙やうにかけけらして。
いまめきたるすそごの此本帳だとてけらし。けらは
しもづへるぞ。海よふ。さうぶがれのあらん。ふ
さあいのうすもれくかぎこしたるけらもべぞ。西乃
基(玉)のなめるこれましくなれたるかぎり四人。志も
げんへはあふちのすそごのもなぞしこの若紫の色
しらるかしさぬけふのよそひだなり。ぶちなるのは
こさひとかき○に。なぞしこがき○のかぎりんなど。
胡とうまてをのくいどこがほなるもてなし
家あり。けりやなるを吾ぶべしなどはめ紙とそけ

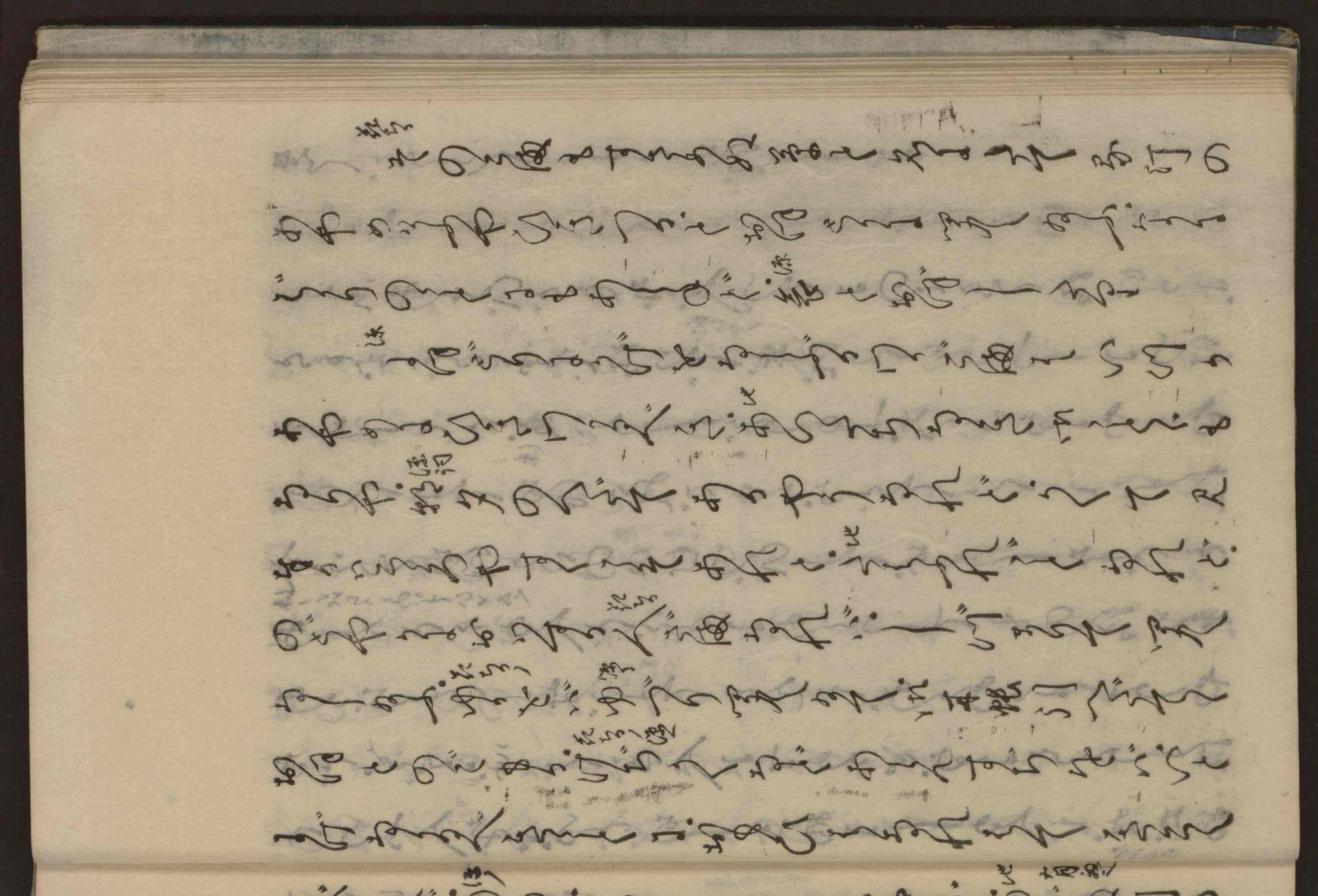




此はなるのあやめもしぬことなれど。舎人（とねり）どもさへえんなるさうぞくとつくして。身をなげうて。まどいしなどとうるぞおしかりは。南の町をとりて。もうぐとあれば。あるるまもかやうしけるき人だはこそり。打毬（こぎうらく）楽納（なそ）籟利（ヨらくそむう）などあそびて。うちまけのらんさうどものくしるも。よる入たてく。何ぞもこうず。なてぬ。とねりどもの緑（くく）。しれぐ。始いてふけて。人どこれあがれのひぬ。おとぐいこ（涙）なるよれとのごもりぬ。地ぐうなどこそしのひて。共のこのこやの。人よりはこまなくもれしのふれ。うちなどはまぐれねど。ようは氣色などよしある



あいぎやうつきたる君也。思ひてこゝのひつやうしと
いへどれこそあれとのまふ。れ（花ちる詞）かどうとうりこそも
のしゐへどねびまさりてぞこしこまひける。年
比くありるさぶ。ひろ。むつびこそしこまふと字
とべれど。むりしのうちつゝりまてほのこをりし後。
おぼつるしりしいとよくこそうちなどねび
まさりゐひまそれ。そ（蛍ノ才之）ちのこそよくもれしゐふめ
れど。けそひおとりて。おほ君のゑ父まぞもれし
ゐひけるとの給へば。ふ（ほん）くこゝりゐひりけるとと
おぼまど。ほくこそしてゐをあるとばよしともあし。
かけ給ひず。人（地）のうへとゐんつけ。おとし先ぞ後のこ



のべ、それば、あるがちまもたえて給ひず、なぞ夜(比 有恩之)何の
年よりもいたくしてそうしかたまつれぐ
なれば、れかるぐ(を)詮抱(を)從などのすさひまて、あし
くしまふ、あしのれかるくさやうのことをも
らしありてしるしまひて、姫(ぬぎノ)君のれかるまなりまふ。
西(む)のくいまは、ましてめづらしく覚て給ことのすぢ
なれば、明(ほ)書かさくよくいとなをおもすつきなくしぬ
ワ人あまるあり、さ夜ぐまめづらしうなるひとの
うへなどを、まことまや(いろ)侍まや、いひあつめたる
中にも、ワが有様のやうなるいなりかなしとこゝふ。
(抱從なあり)もしこうしの姫君の、さしあたりけんありは、さうまれ

まて。いまれ世のおぼしもなをうろことなめるに。
（住地法にあるなり）
かぞへのうこが。ほどくしうまけんなどぞ。うまい
（法うしそ大夫ノ盛がるす）
けんがゆくしさ紙おぼしなぞしへ。諸（ほ）夏いこなる
りなるまうる地どものちりけく。此先まこらなれ
れば。（詞）おれむつし。女こそうさうしぞ。人まあざ
むかれんとむまれたるまれなれ。うしらの中ゝ
まことはいとすくなしんを。何しるく。うるす
どろごとは心をうつしたかれまひて。おけうは
しきさこごれがこのこごるしもしてでうきまふ
よとてけしひ給地かし。又かる世のふることなら
でいげまなるをかまぎるくしなさ。つれぐを

れどさしもあしじやとの給へど。げ（必詞）まいりもなる
なれたる人や。さ面ぐまさしたる給ふん。あぐいと
まことのことこそおもひあへられれとて。硯を
としやすもあへば。こちなくもこそおとしてげるが。
神代よりせまあることとさるしをさけるなく。因
本（ぞ）記などいふじうるそばぞし。これしまこそこちく
志をくらしきことはあらめとてけひ給。その人（せうしうとき）
うへとてありのまゝまいひ出ることこそなけれ。
よきもあしきもせまかる人の有様のこうまもあら
ぞ。字まもあまりいとを。後の世まもいひつゝへこせ
まほしきかしぐを。心まこめぐこそて。いひなさ

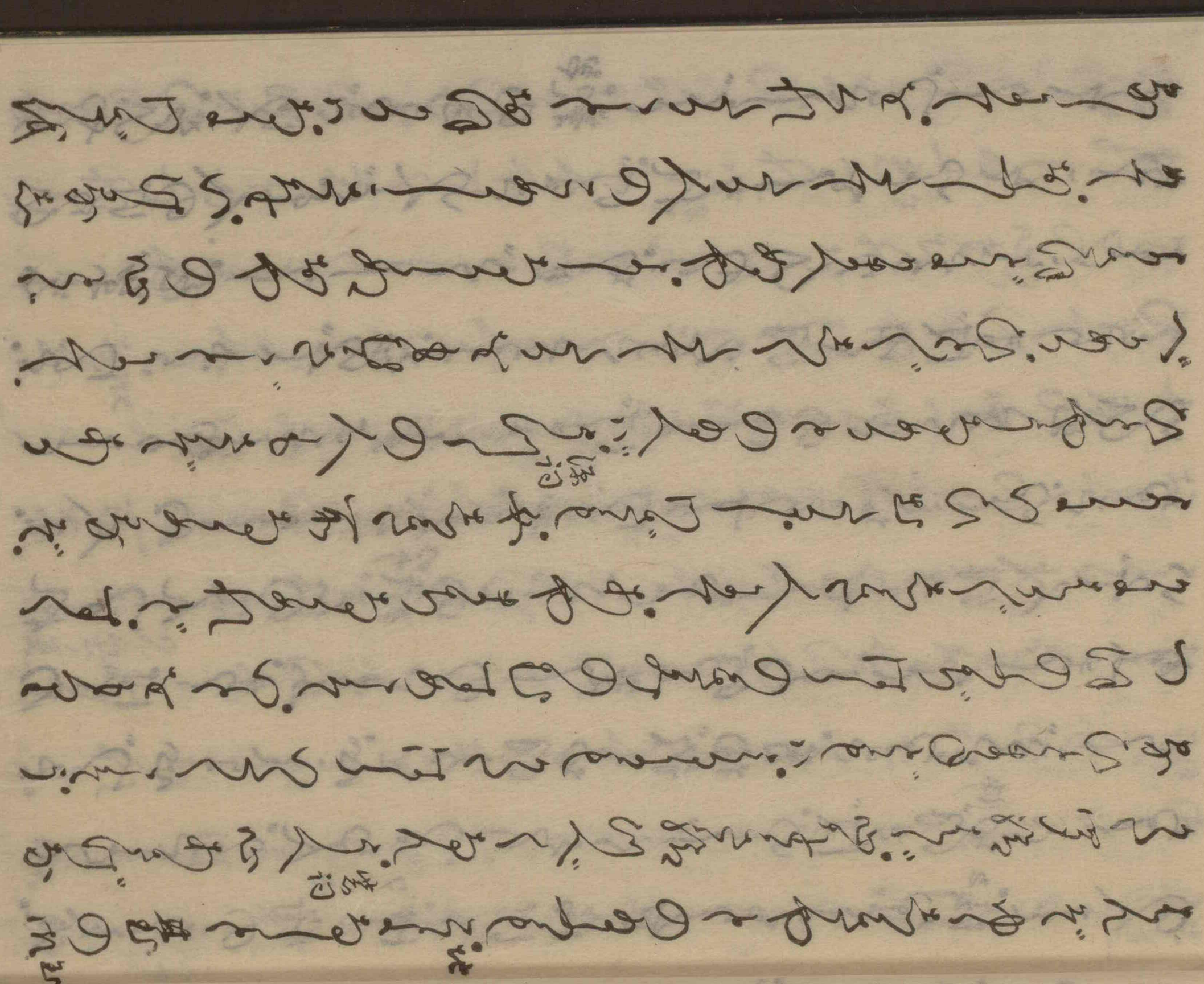
ちゞめたるなりけらさき海はいふとそてハなきことの
根元より出て。人はさるがりんとそハおきてわしきさ
まれめづらしきことゝもおほくあめる。これらく
まつはるれば世の外のことあらずうし。人のこゝろの
ぎえけりやうもろ。おぼしやまとみ世のこと
あれど。昔今のまうもろべし。かなさことわきさ
ことのけぢめこそわしめひく。かなはそろ〳〵
いひもてん。もことの心さぐひてあるありけり。佛の
いとうりしき心まそ。どきさとるはへる仏法も。方便
といふこと。あらそ。さとりあるき紬ハうしこころふ
類を垂べくあるん。方ホ證の中にあほれど。いひ

もてゆけばひとつむまゝありて菩提（がだい）と煩悩（ぼんなう）との
へだたりなん。この人のよさあしさぢりのことは
かちりけり。よくいへばすべてなるごとも。せなし
うしぎなりぬや。抽鏡（菓子ノ事）をいとけぎとのことはのなひ
なしけざてうろふることのなるは。まろかやうは（源秋かるすを絶之）
ぢほうなりきれものゝ抽鏡はありやいこじうけど
とき抽の姫（志抽ぢうの姫志之）君も（ぢノ）れこころのやうはつれなくそらおぼ
めきしてうは世るあしじれいざこぢひなさ抽鏡
にして世るつくさきんとさしよりてきてしなへば
ぢかをひき入て（羽）さしぎともかくめづらかなることは
世語にこそは成侍ぬべかれとの給へば（源羽）見ぬ

かなやおぼしめふげにこそまるなき心ちすれとて。
地 よりねのへるさ夜いとあぎれたるを
ちひあまり昔の詠をたづぬれどおやにそむ
けり子ぞたぐひなきふけうなりハ仏の名にもいと
ドくこそいひたれとののへど詞も もたげ給ハ
ねぞ。ほぞ。ぐしとかさやまつくいたじう根たまへぞ。
かうしして
かうさ詠をたづぬれどげにあまりかり出世に
かりおやの心ハ地 どきそしのふも心 ほ ちげしかれぞ。
いといくもこぐれ給ひず。かくしていかなるべき
此有様なるんむらさ紀の上も姫君の此あつらへに

ことづけて。抽従ハ拝がくおぼしたり。こまかく
抽従の忍まてあるを。いとよくうさたる忍れとて
(源詞)
ゆらんぜ。ちいさき女(忍れぐさ)の(女(忍れ)の)ちゑ心もちゑくて。ひるも
しゆへる所を。昔の首さ後おぼし出て。女(漢)君をみ
ゆふ。(源詞)かゝりけるハどちぐるいるまざれたりけん。まろ
こそ程たりしまさりべく。心のどけさハ人に似ざり
けれとこそて出ゆへり。げ(漢詞)ゑ女ぐひおぼしめこと
どもハ。これこゝあけ先ゆへりけるし。娘(四名ノ)君の此前
まて。此世なれたる抽従など。なよこそうをゆふそ。
みそか心つきたる抽のむすめなどは。おりしとなは
わしゆどかゝることくよくハありかるもとこゝなれ結

たんぞゆくさきやとのみつもこよなしと甚の此
る字給たじ心をさ給けべくなん。うへ心あさげな
なひとまほどもいふるもかくはらいくこそう
つはのふぢはらのきみのむすめこそいとをもな
りまたらぐさき人まそおやまちなれど。すく
ちまいひむさうしけぢも。女さき所なるなぞ。
ひとやうなめるとのめへバうけしの人もさぞあら
べかめる。ひとぐさくこそこそをもむさごとなて。
ちさほどまりまへぬやよしなるしぬおやの心とぐ
めて。おふしこそこそ人のこめしこそをいけなさ
なしまそ。をくれこそことおほかるはいまはけぢ



してかしづきしぞと。親(おや)のしまぎ法人。しひやら
なくこそいとをしかれ。げよさいんど。ま人のけりひ
よとこえたるハかひあり。おもぐくしかし。玄葉志
かぎりまばゆくほめをきたるに。しいでたるわざ。
いひ出たることの中に。げよとこえきしゆること
なさいとこゝおとりするわざや。しんぐてよろぬ人に。
いかで人ほめさせじなと。たゞこの姫(四字)君のてんつれ
なふまじくとよろげに。常しのたまふ。まくはく乃
もしぎたるさ。昔物語もおほかるを。心えに心づき
なしとおぼ(涼ノ)きば。いとじくえりつゝなん。かさとく
の人さを。絵(ゑ)などにもかゝせ給けり。中(タ)将(地)のさとは。

の人さを給ひしをみものにいはれのこ

（紫）ことなるはけどもくまそなし寛かへれど。姫君の

われらはさしまちさそて給はずなりし給。

（源氏）まづ世の程はとてもなくてもおなじごとなれど。

あらんなをせひやまぬこつきせひあさぬなう

こゝにもこそどうかさそはおはゆべかれとてこなたと（岩藤姫君ノ道）

おもそのおすのうちはゆかしのへうぶいちん源氏（夕ヒと）

女房の中はゆかし給はずおまるおいもぬれおもうろ（源氏君子）

ひまそいつやむごとなくうつさ寛かへり。おかぶ（地）

なくの心なちねなども。いと抱ましくずまめやうな（夕ノ）

まれしなふ忘なれば。うきろやすくぞしゆづれり。（夕）（源ノ）

（岩藤）まていなけるひ。みれおもひなどのけうひのこゝ

れば（タム）の人（雲カ）のもろともあそびてぞぐしたとし
身のまづさひ出られば（ひ）ぬるれとれくこやげ
へいとよくしまて（おなしくまうちしほれ）
ぬひかり（地）さも有ぬべきあたりにはちるしごとも
のこまひ（タノ）ふるゝはあまるあれどこれミくべくも
たれさずざるゝにちどうはこざらんと心とまる
ぬべきをもたゐてちをざりごとにたるして（ちゝ）
かれこどりの袖をこしちをしてたゞちと（ぶふこう）
のこそやんごとなきふしにもとまるけり（あか）
がちにちどがくづくひまどもぐこそもふるくらに
ゆ（ゆ）しまひもしけべかれどつくしとさひし

ありくりぞ人にもこゝろをそへてまゐらんと。
ちひさきしことハされど、こそ。さしじこゝろ
また、ぞろかるしめ衣をつくりこゝろざしてあはれなる
つくれ思ひくらず。をかしとれ兎ばあらども分まろし
あるきのこゝろさしあはり。武のひめぞうえ志ん
賓様と。右の中ねハいとあはれしこそいひ
よろこびりもいとたかれなれがこの志をぞうかゞ
ありされど。人のこゝろまてハ。ほどりしさハざるり
そうとつれなくいくてぞなれし詮けり。昔乃
ちりんぐ家の流あつくひまくらり増のあとぐ
ハれ子どもちらぐいとあはりまゝそのあはひぞ

ゑおぼし人がしるまさがひつ心にまかせたる
やうなる。若しいきほひにて。又なくしてゐふ。女は
あまるもおいきぬを。女れ（こさでん）もかくおぼしてことの
さぐこほりゐひ。姫（雲ゐ）君もかくことにぶふさ海にて物
志ゐへばいと口おしとおぼして。（ねノ）捜（ん）なでしこを忘れ給
ひず。もはく打にも絶出給しことなれば。いかに女にそん。
抽さるなりけり。親（女ぎ）の心にひかれてらうたげなり
し人をも。り来志しず女にうつくしすべて女ぎといふ
ちん抽なんいかにもくめもなつまじかりけり。さ
りらに我子といひて。おやしさ海にてもぶれ
やすしん。とてもかくても罪し出こぐと。衣におぼし

わすれ出でても出こいと衣にあはし
けるゝ。夫遅にもしさやうなる名案する人あらば
こゝとぐめる心のすさひにまかせて。さりまじき
ともあはりし中に。是はいとしかとしなべての
きはにはさはざりし人のちなき抱うむじをし
てゞくすくなりける抱のくさりひ充とつを先ひ為
なことの口なしきことと常にのなひ出中代なぞは
さしもあらず。折忘ぬひけりを人の猶ごにつけて。安
ぞりしづきぬへるさぐひがに。我おもはせましもり
なきぬいと心うくはいなく見す成り。爰こゝひて
いとよくあはすり抱めして合を給けるに。もし年代
此心にも志られ給りぬれ子を人の抱になして。男台

69038
6AP78